

社会科学の対象

The Problem of Knowledge concerning Society.

渡辺安夫

Yasuo WATANABE

社会科学の客観性はいろいろの形で問題にすることができる。しかし、そのためには、社会科学の対象である社会が、社会として、他のものから区別されてあるということが、先ず最も基本的な問題として要求される。問題というにはそれは余りにも素朴であるが、社会科学の客観性という言葉が社会科学の成立という言葉に置き換えた場合、この問題のもつ意味ははっきりしてくる。社会科学の客観性の問題は、社会科学は科学として成立するのかどうか、という問題に連なるのであるが、それが社会科学として成立するためには、その対象である社会が『社会』という一つの総体として扱われ、他の対象から、さしあたっては自然科学の対象である自然から区別されなければならない。区別されてあるということは、自然科学の対象である自然がそれ自身の法則にしたがって存在するように、社会科学の対象である社会もそれ自身のもつ法則にしたがって自己運動するものでなければならない、ということを含む。社会が人間を契機として構成されるにも拘わらず、主観から区別される客観的実在であるということを含み、断るまでもないことであるが、社会が神からも区別されてあるということを含む。

社会科学の客観性を問題にする場合、その対象である社会は他のものからどのような形で自己を区別し、自立せしめているか、ということが、このようにして改めて問題になる。

ここで問題にしようとしている社会科学はさしあたりはマルクスのそれであることを、あらかじめ指摘しておかなければならない。マルクスの場合、周知のように、社会科学は経済学の形をとっている。しかし、彼の場合、経済学は社会現象の中の単なる一現象を扱うものではない。それは社会諸科学である他の法律学や政治学などと同じ線の上に並立するものではない。経済学はこれら社会諸科学の根柢となるべきものであると考えられている。経済現象を通じてなされる社会認識は社会のある一つの側面についての認識ではなくて、社会の土台についての認識であり、その上において他の社会諸認識もはじめて意味をもつものとされる。社会の経済的構造は社会の現実的な土台であり、社会の解剖は経済学に求めるべきである、という考がそこにはある。したがって、抽出される社会、それは人間と人間との関係の総体として扱えられなければならぬのであるが、その人間と人間との関係が他の社会諸科学の扱える人間関係（法律学も政治学もそれが社会科学の一つである以上、そのすべての現象を本質的には人間関係において扱えなければならない。）の土台とならなければならない、という考がそこにはある。この考を定式化したものが例の経済学批判序言の中であれである。(P.K. S. 13) この考が正当なものであるかどうかは、また別の考察に委ねられな

ればならない。が、ここではこの考を前提し、その上に小論の考察を展開することにする。

社会がそのようなものとして捉えられなければならぬ人間相互の関係は、いくつかの社会諸科学の成立が示すように、人間関係を如何なる面で捉えるかに応じて、いくつかの形で示し得る。マルクスの場合、それが経済的側面から捉えられていることから、それが生活資料についての考察を中心とするものであることから、社会は人間相互の関係でありながら、自然との関係をなんらかの形で含まざるを得なくなる。(生活資料——それは自然を人間の側からみたものである。)人間を人間との関係において捉えると同時に、人間を自然との関係において捉えなければならぬことになる。しかも、マルクスにおいては、経済現象は生産を基礎にして捉えられており、生産の形態が消費、分配、交換の諸形態を規定し、これらの相互関係を規定するとされていることから、自然は人間にとって二重の意味で重要になる。労働の主体としての人間が生産において直面するものは自然、労働の媒介なくして存在し、しかも、労働の前提としてそれに先行する自然であるからである。生産は人間の自然に対する関係として、人間と自然とを契機とする一つの過程、運動として成立する。社会現象である経済現象を生産を基礎にして捉えるということは、その人間と人間との関係がなんらかの形で人間の自然に対する関係を含むものとして現われなければならぬということである。経済学であるという理由だけではなくて、それが生産を基礎にしている、という理由をも含めて、マルクスの場合、自然はとりわけ重要な意味をもってくる。

そして、このことは断るまでもないことであるが、自然が重要な意味をもつに至ったのは、結果からいえば社会科学が経済学の形をとり、その経済学が生産を基礎にしているからだといえるのであるが、事実においては、それがそのような形をとるに至ったのは、マルクスが人間の存在根拠を社会に求めると同時に自然に求めたということ、そして、結局は人間を自然として把握したからこそである、といえる。社会科学、人間と人間との関係の合理的認識に自然が関係してくるのは、本来的にはこの理由からである。そしてまた、経済学が社会の一つの側面についての認識ではなくて、社会そのものの、そして、歴史そのものの認識であろうとするのも、人間の存在根拠の徹底的な追究がマルクスにあり、その上に社会、(歴史)の把握が行われていたからこそであるといえる。

(一)

マルクスの場合、人間と人間との関係は交換によって成立している。交換はさしあたっては生活資料の交換であるが、そして、マルクスが考察の対象とする商品生産社会では、それは商品という形態をとるのであるが、この商品の交換によって人間は他の人間に関係し、この関係の総体としての社会を形成する。しかし、人間はどうして他の人間と関係せざるを得ないのか。しかも、それはどうして交換を通じてなされざるを得ないのか。この問題は、人間相互の関係が、実は、人間と自然との関係を離れてはあり得ないものである、という問題に連なってゆく。そして、人間と自然との関係は、結局は、人間が自然であることによって成り立つ。

しかし、そうだとすれば、交換を通じて成立する人間と人間との関係は、人間と自然との関係、

そして、それは人間が自然であることによって、また、自然と自然との関係となるのであるが、そのような人間と自然との関係とどのような形で関係するのか、という問題を含んでいる。しかも、人間と人間との関係は、社会科学が科学性をもつためには、それ自身で自立するものとして抽出されなければならなかったのであるから、この問題は重要な意味をもってくる。

さしあたり、ここでは、次のことを明かにしておきたい。

人間はどうして他の人間と関係せざるを得ないのか、という問は、人間はどうして自然と関係せざるを得ないのか、という問に連なってゆく。

マルクスの場合、人間と自然とは引き離されて孤立的に考察されるものではない。人間は人間であることによって自然と鋭く対立する。しかし、両者が『対立』という一つの間を成立せしめ得るのは、実は、前者が後者の基盤において把握されることによってである。人間は人間であることによって自然とは区別される。しかし、人間は人間という形をとった自然である、という意味においては、他の自然と同じである。人間はこの場合、物質—生命—意識（自己意識）という形で捉えられる。つまり、人間は意識的存在であることによって、しかも、単なる意識的存在ではなくて、自己意識的存在であることによって他の自然から区別される。しかし、同時に、人間は生きた物として、身体的存在として、人間であり、自然である。人間が物質—生命—意識の形をして在るということは、マルクスの言葉でいえば、『生きた、自己意識ある物』として在ることは、(K. S. 211)人間が有限的、相対的存在として在ることである。物質、生命、意識のそれぞれの形において、人間は、つねに、他のものと必然的に関係せざるを得ない。他のものとの関係においてのみ人間は人間でありうる。物質—生命—意識的存在であり得る。

物質としての人間は意識の外に存在するものであり、意識に対しては感性的対象という形で在る。感性的対象であるということは、しかし、それが有限的存在であり、他のものとの関係においてのみ存在し、一定の条件のもとでのみかかるものとして存在し得るものである、という意味を含んでいる。対象的存在として他の感性的対象に対する、という意味を含んでいる。マルクス自身の言葉を掲げてみる。

『その自然を自分の外にもたない存在は、決して自然的存在ではなく、自然の存在に参与しない。自分の外に如何なる対象をももたない存在は、決して対象的な存在ではない。それ自身が第三者に対して対象でない存在は、自分の対象として如何なる存在をももたない。つまり、対象的にふるまわない。彼の存在は対象的な存在ではない。』(H. S. 85)

『对象的に、自然的に、感性的にあることと、自分の外に対象、自然、感性をもつこととは、または第三者に対して自分自身が対象、自然、感性であることとは同一のことである。』(H. S. 85)

人間が自然であること、感性的対象であることは、人間が自分自身の外に存在する他の自然と関係することによってのみ、存在しうることを示す。人間が客観的諸条件を離れては存在し得ないのであることを示す。しかし、人間が物、感性的対象として自然であると同時に、生きた物として、生きた感性的対象として自然であることによって、感性的対象である人間の他の感性的対象である

自然との関係は身体的、感性的対象と他の感性的対象との関係となる。単なる感性的対象と単なる感性的対象との関係ではなくて、身体的、感性的対象がそのようなものとして存在しうるための関係となる。生命と、生命がそのようなものとして存在しうるための客観的諸条件との関係となる。具体的には、それは、人間と自然との間に成立する質料変換という事実を媒介として成立する。さきほど掲げた言葉に続いて、次の言葉が意味をもつことになる。

『人間が身体的な、自然力的な、生きた、現実的な、感性的な、対象的な存在である、ということとは、人間が現実的な、感性的な諸対象を彼の存在の対象として、彼の生命発現の対象としてもつということ、つまり、人間は現実的な、感性的な諸対象においてのみ、彼の生命を発現できる、ということの意味する。』(H. S. 85)

『彼の本能の諸対象は彼の外に、彼から独立した諸対象として実存している。しかし、これらの諸対象は、彼の欲望の対象であって、彼の生命諸力を働かせ実証するのに欠くことのできない本質的な対象である。』(H. S. 85)

人間と自然とは不可分離なものとしてある。身体的存在としての人間、生命ある物としての人間は、人間がそのようなものとして存在しうるための客観的諸条件を自らに併せ得たとき、両者を併せたその全体において、はじめて現実的であり得る。人間、または、生命の概念は客観的諸条件である自然を併せたその全体において成立する。それは、丁度、意識の概念が、その対象を併せもつとき、はじめて現実的な概念でありうるのと同じである。そして、このことは、自然が人間の身体であるとき、更に徹底する。自然が人間にとって決定的な意味をもつようになる。

『自然、つまり、それ自身が人間的肉体でない限りでの自然は、人間の非有機的的身体である。人間が自然によって生きるということは、言い換えれば、自然が人間の身体であり、人間は死ぬまいとすれば、自然によって絶えまない前進をつづけなければならぬ、ということである。』(K.L. S. 103)

自然は人間に与えられたものであり、随って、それは、彼の皮膚、彼の感覚諸機関と同じような彼の活動の前提である、と同時に、自然は人間によって形成されるものであり、この形成を通じて、実は、人間は人間として存在しうるのである。それ自身が身体的存在である人間は、自然を自らの身体とすることによって、それは飽くまでも非有機的的身体という意味においてであるが、人間として現実存在しうる。

しかし、自然を自己の身体とするといっても、その自然が非有機的的身体であるという理由から、又、人間が『生きた物』であると同時に『自己意識のある生きた物』であるという理由から、人間と自然との関係は直接的な関係、または、限られた一面的な、固定した関係ではあり得ない。問題にしている段階では、両者の関係は質料変換という事実を媒介にした関係となって現われる。それは、人間が自然になり、自然が人間になる、という形で把えられるのであるが、具体的には、それは、生産と消費という形で把えられる。そして、さしあたりは生産よりも消費が、(生産は反面消費であり、消費は反面生産でもあるが、だからこそ、それらは質料変換をなしうるのであるが) 所

謂生産よりも所謂消費が問題になる。つまり、人間は、さしあたりは、食うこと、飲むことによって自然と関係し、そのような行為によって、自然との間に質料変換を成立せしめる。そこでは、自然に媒介されて人間の側に質料変換が成立する。しかし、消費は本来的には、生産を前提するから、また、人間が自然そのものと、(その典型は土地である)関係するのは、本来的には、生産においてであるから、人間と自然との関係は、質料変換という事実は生産においてこそ捉えられなければならない。質料変換は人間に媒介されて自然の側に成立するという形で捉えられなければならない。そして、人間が『生きた自己意識ある物』であることが、人間の自然に対する関係を人間特有の形にする。人間が自然と必然的に関係せざるを得ないのは人間が身体的存在であるからであるが、人間が自己意識的存在であることは、人間と自然との関係を身体的組織の制約から解放せしめる。次の言葉が意味をもってくる。

『動物は直接的な肉体的な欲望に支配されて生産するだけである。ところが、人間自身は…肉体的欲望からの自由の中ではじめて真に生産する』(K.L. S. 105)『動物はその属している種の基準と欲望にしたがってかたちづくるだけであるのに対して、人間はあらゆる種の基準にしたがって生産することができ、また、どの場合にも、対象に対してそれ固有の基準を与えることができる。人間は美という法則にしたがってかたちづくることもできる。』(K.L. S. 105)

人間と自然との間の質料変換は人間の意識を通じて、意識的な行為を通じて成立する。人間は自然の形態変化を生ぜしめるだけではなくて、自然のうちに、同時に彼の目的を実現するのである。それは、単なる事実ではなくて、意味をもった事実となる。

この質料変換は、それが、人間と自然との間に成立するものであり、人間が人間という形をした自然として人間的側面と自然的側面をもつことからして、質料変換そのものが人間の側からみた面と自然の側からみた面との両面をもつ。質料変換が人間の働きかけによって成立し、その結果が人間にとって意味のあるものであるという限りにおいて、それは人間の側からの面を構成し、人間が感性的対象としてあり、自然に対しては一の自然としてあるという限りにおいては、それは自然の側からの面を構成する。前者の場合、欲望(目的)、労働過程(生産過程)、結果(生産物)のそれぞれの段階において人間の側からの考察が可能になる。自然は欲望の対象としての自然、人間の欲望に適合させる合目的的な活動の対象としての自然、人間の目的がその中に実現されている、人間にとって有用なものである自然等々。この面からすれば、質料変換は特殊な自然質料を人間の特殊な欲望に適合させる特殊な合目的的、生産的活動とその活動の対象である自然との間に成立するものである。(人間の側にも自然の側にも特殊性が前面にでてくる。)人間はつねに自己自身の側に立ち自然に対する。欲望、(それはヘーゲルも指摘するように自己意識の典型である。P. H. S. 135)労働過程、結果において人間は自然をではなくて、自分自身を、対象化された自分自身を意識し、自分自身を産出する。人間を他の自然から区別せしめる自己意識が、この面における人間と自然とを規定する。自然は人間の側からみられた自然となる。しかし、これは反面において感性的対象と感性的対象との関係でもある。自然と自然との関係でもある。質料変換という事実は、こ

ここでは、自然（人間）——自然の形を、そして多くの場合、これは自然（人間）——自然（労働手段）——自然（労働対象）という形をとる。そして、自然と人間との関係を人間の側からみた場合、欲望——労働過程——結果の全過程において意識の運動が成立したように、自然——自然——自然の全過程において一連の力動的な運動が成立する。労働は自然に対する自然力の発現であり、その結果は自然力の作用による自然の形態変化である。それが自然対自然の関係である以上、その関係は自然的関係でなければならず、ここで支配するものは自然法則である。ここで一度だけエンゲルスを援用する。彼は人間が自然と自然との間に成立する運動を認識し、この運動が成立している諸条件を、自然と自然との関係を、人間自身が自覚的につくり出し、この運動を再構成することができる、と述べ、更に、いやそればかりではなく、人間は自然そのものの中では絶対におこらない運動（産業）さへ新たにこれを生じさせることができる、と述べている。（N. S. 244）この言葉はひとつには人間が自己意識的存在であることと、その自己意識的存在である人間の自然に対する関係の仕方、随って、それは人間という自然の最も人間らしい関係の仕方であるが、そのような関係の仕方を示すものである。人間と自然との関係が、一面的な、固定的なものではないことを示す。または、人間と自然との関係が過去から一面的に限定されるものではなく、同時に未来からも限定されるものであることを示す。しかし、それにしても、その運動に関係する人間は自然として自然に関係するのでなかったら、この運動は成立しない。エンゲルスの言葉も、このことを併せ考えると、その内容はより具体的になる。マルクスの次の言葉をつけ加えておく。

『人間そのものは、労働力の単なる定在として考察すれば、一の自然対象であり、一の物（たとえ生きた自己意識ある物だとしても）であって、労働そのものは労働力の物的発現である。』（K. S. 211）

『人間はその生産においては、自然そのものと同じように振舞いうるのみ、すなわち、諸質料の形態を変化させるのみである。そればかりではない。人間はこの形態変化労働そのものにおいて、たえず諸自然力によって支持される。』（K. S. 47～48）

以上の考察に、更に、次のことがつけ加えられなければならない。

人間と自然との間の質料変換は、人間の側からみた面と自然の側からみた面との二つの面をもつのであるが、それは人間の自然への働きかけによって成立するものであるということ、そして、社会認識を問題にしているいま、人間と自然との関係は人間の側から問題にされるとき、はじめて、問題構成に積極的に参加しようということである。質料変換が単に自然と自然との間の問題というならば、社会認識の問題とは、すくなくとも、本質的な問題とはなり得ない。質料変換が人間の働きかけによって成立し、その結果が人間にとって意味のあるものであるとき、はじめて、それは社会認識の問題となりうる。質料変換のもつ自然と自然との関係は、したがって、飽くまでも人間の側からみた人間と自然との関係（具体的には生産）の自然と自然との関係でなければならない。自然——自然、または、自然——自然——自然の間に成立する運動は、自然としての人間を起点とするものであるとき、はじめて 社会認識の問題として意味をもつ。人間と自然との関係を質料変換

において、生産において把えたとき、既にこのことは前提されていたのであるが、ここで、改めて確認しておく。

しかし、それにしても、人間と自然との関係は、その関係が人間の側で成立するものであるにせよ、そのままではまだ社会の、人間と人間との問題とはなり得ないであろう。

人間が人間として存在するためには、人間は自然との間に質料変換を成立させなければならない。人間が生きているということ、人間が生活しているということは、つまり、人間が自然との間に質料変換をなしとげているということである。それは、人間が存在するための永久的な、自然的な条件である。それは、如何なる社会形態とも係わりなく存在する。しかし、それは、如何なる社会形態にも等しく共通する。社会あるところ、それは、つねに存在する。人間は人間との関係においてのみ人間として存在しうるるのであるが、同時に、人間は自然との関係においてのみ人間として存在し得るのであり、人間と人間との関係は、自然に対する関係を離れてはあり得ない。人間と人間との関係の人間の自然に対する関係への係わりかたが、ここで、改めて問題になる。

(二)

あらかじめ、次のことを指摘しておきたい。

人間と人間との関係において、人間の自然に対する関係は、人間の他の人間に対する関係となつて、先ず、現われる。人間の自然に対する関係は他の人間に媒介されて間接的に成立する。もっと言えば、人間の自然に対する関係においては、人間は自然に働きかけることによって、質料変換を成立させることによって、人間は人間として存在したのであるが、人間と人間との関係においては、人間は他の人間がそれぞれなしとげた質料変換の結果によって、それぞれ自らの欲望を充足させ、かくすることによって、人間として存在する。したがって、ここでは、具体的には、交換が問題になる。人間は相互に生産物を交換することによって自分自身を人間として存在せしめる。そして、この場合、問題になっている社会形態では、生産物は商品の形態をとるから、人間と人間とを結びつけるものは、商品の交換となる。

このことから、更に、次のことが指摘される。

それが商品の交換を通じて成立する関係である以上、人間と人間との関係は人間と人間とが直接結びつく形をとらない。人間は他の人間の所有する商品に結びつくことによって、商品の所有者である他の人間に関係する。人間と人間との間に、このことが相互的に成立する。交換の当事者にとっては、他の人間がではなくて、自分自身の欲望の対象である他の人間の生産物（商品）が問題になる。人間と人間との関係は欲望とその対象との関係である。人間と人間とを結びつけるものは必要性である。それは、本来的には、生産ではなくて、消費の立場において結びつく。このことに関係するマルクス自身の言葉を掲げてみる。

『諸商品の質料的差別は交換の質料的動機であつて、商品所有者達を相互に依存させあう、というのは、彼等の誰も自分自身の欲望の対象を手にしておらず、しかも、彼等の各々が他人の欲望の対象を手にしてしているからである。』(K. S. 167)

そうだとすると、問題になっている人間と人間との関係は、人間と自然との関係が人間と人間との形をとって現われたものといえる。人間と自然との関係が人間を媒介にして成立している。自然的な類的関係としての男性対女性の関係では、人間の自然に対する関係は直接的に人間と人間との関係という形をとり、人間と人間との関係が直接的に自然と人間との関係であるのに対して、ここでは、人間と自然との関係は間接的に人間と人間との関係となる。社会（市民社会）を『欲望の体系』として、個々の人間が特殊的な目的を追究し、実現するための『相互依存の体系』として捉えたヘーゲルの社会把握にそれは連なるものである。この立場では社会科学の対象である社会を自立的なものとして捉えることはできない。(R. § 189. § 198)

ここで、人間相互の関係を成立せしめる交換について、つっこんだ考察が必要になる。そして、このような形で考察が要求されることから、使用価値に対する価値が改めて問題になる。何故かと云えば、使用価値は自然の人間に対する定在であり、人間と自然との関係において成立するのに対して、価値は人間と人間との関係において、交換において、自然から自立するものとして成立するからである。このことに、更に、次のことがつけ加わる。使用価値は人間と自然との関係において成立するのであるが、具体的には、それは欲望とその対象、物の有用性と人間との関係において成立し、使用価値は消費においてのみ自らを実現する。つまり、人間と自然との関係は、ここでは、本来的には消費の立場において成立する。与えられている社会では、使用価値は商品の一要因であり、随って、労働の産物であるという視点をも含めて考察しなければならぬのであるが、生産物であるということは使用価値の本質的な規定ではない。これに対して、価値にとって労働は本質的な規定である。それは、直接そのままではないが、生産の側において成立する。人間と人間との関係が、人間と自然との関係から自立するためには、価値が使用価値から徹底的に区別され、価値が価値として自立的に存在するのだからなければならない。人間と人間との関係は交換において成立するが、それは、使用価値の交換においてではなくて、価値の交換においてでなければならない。先刻指摘した人間と人間との関係が、実は、純粋な人間相互の関係ではなくて、人間と自然との関係が人間に媒介されて人間相互の関係という形をとったものに過ぎなかったのは、交換を使用価値の面のみからである。

それにしても、価値が人間と人間との関係を表現するという場合、その人間はどのような形で捉えられているのか。また、その人間と人間とが交換を通じて、価値の交換を通じて関係しあうという場合、その交換において具体的に交換されるものはなんだろうか。さしあたりは、次のように答える。

人間と人間との関係は生産者と生産者との関係として捉えられ、人間は労働という形で捉えられる。そこで交換されるものは具体的には労働である。

しかし、これだけでは答にならない。

一般に、交換が成立するためには『等置』の概念が前提になる。『等置』は質的側面と量的側面の両面から考えられなければならないが、ここで問題になるのは、さしあたり、質的側面である。交

換が成立するためには、ある物が交換されるためには、それらのものが相互に同質でなければならぬ。使用価値の場合、それは、有用性という形で現われる。しかし、その有用性は、相互にとってそれぞれ有用であるという形をとるから、更にまた、その有用性が物の属性に条件づけられていることから、使用価値は質料的差別をもつ限りにおいて交換を成立せしめ得る。随って、使用価値を生産する労働ではその労働が有用的なものでなければならぬと同時に、つねに、その労働の形態、労働力の支出の具体的形態が問題になる。この形態は、労働の目的（欲望の内容）、作業様式、対象、手段、及び結果によって規定される。つまり、使用価値を生産する労働、具体的、有用的労働は、つねに、自然質料との関係においてのみ成立しうる。『生産力』の概念が使用価値の側に、したがって、具体的、有用的労働の側に成立し、価値の側に、したがって、抽象的、人間的労働の側に成立しないのも、つまりは、このことに由来する。何故かと云えば、生産力は、原理的には、人間の自然に対する関係において成立するものであり、具体的には、それは人間の自然に対する働きかけの度合、作用度を示すものであるから、生産物の具体的、有用的側面にそれは関係する。生産における自然的質料の面が問題になる。生産された使用価値の量と比例関係にある。その変動の結果は人間と自然との関係の面に現われるが、人間と人間との関係である価値の面には現われない。

これに対して、価値を生産する労働では、詳しく云えば、商品が価値と使用価値の二要因から成り立つのに応じて、それを生産する労働も具体的、有用的側面と抽象的、人間的側面とをもつのであるが、その後者の場合は、価値が自然質料を自らの中から排除することに対応して労働力の支出の具体的形態も問題にはならない。抽象的、人間的労働の場合、その同質化は先ず自然質料を排除することによって、随って、また、労働の有用性を排除することによって可能となる。それは、唯、人間的労働力一般の支出、支出の形態を捨象した、抽象的、人間的労働であることによって同質である。

問題のこのような展開から、ここに、新しく、次のような問題が提出される。

価値の実体である抽象的、人間的労働は、それ自身が自然である人間のその労働を自然的側面において扱ったものではないのか。抽象的、人間的労働とは人間という自然のもつ自然力の支出を意味するのではないのか。

勿論、抽象的、人間的労働が価値の実体となりうるのは、交換を通じてである。交換において個々の労働は同等なものとして相互に関係する。交換においてすべての労働が同質な労働へ還元される。もっと云えば、個々の労働力は社会に前提される総労働力（これが諸価値をではなく価値を形成する）の部分であることによってはじめて同質な労働力となりうるのであるが、個々の労働力が社会的総労働力の部分であることを示すのは、交換においてである。抽象的、人間的労働の社会的な平均、簡単、労働という性格も交換を通じてはじめて示される。

しかし、このことを承認したうえで、なおさきほどの問題を問題として提出してよいのではないのか。繰返えしていえば、価値の実体である抽象的、人間的労働は人間労働を自然的側面において

把え、それを交換において示したものではないのか。

ここで、小論がはじめに試みた分析、人間と自然との関係における人間の人的側面（自己意識的側面）と自然的側面（身体的、对象的側面）との分析を想起したい。そして、その内容にマルクスの次の言葉を併せてみる。

『およそ労働は、一方では生理学的意味での人間的労働力の支出であって、同等な人間的労働または抽象的、人間的労働というこの属性においては、それは商品価値を形成する。およそ労働は、他方では、特殊な、目的を規定された、形態での、人間的労働力の支出であって、具体的、有用的労働というこの属性においては、それは使用価値を生産する。』（K. S. 51）

『人間は自然質料そのものに一の自然力として対応する。彼は自然質料を彼自身の生活のために使用されうる形態で取得するために、彼の身体に属する自然力たる腕や脚や頭や手を運動させる。』（K. S. 185）

与えられているありのままの労働は、一定の形態をとった労働力の支出である。人間という自然に属する自然力が、目的に応じて、一定の支出の形態をとったものである。随って、その労働力から、その目的、支出の形態を捨象すれば、残るものは労働力そのもの、自然力（力）そのものとなる。人間は人間である、しかし、人間は人間という形をした自然であるという場合の、その自然の側面にそれは属する。抽象的、人間的労働とはこの労働力そのもの、自然力そのものが交換を通じて同質化されたものではないのか。交換において諸個人の労働は同等なものとして相互に関係しあうのであるが、そこで、関係しあうものは人間に属する自然力そのものではないのか。

このことが承認されるならば、はじめの課題に対して次のように答えることができる。

人間と人間との関係は自然力と自然力との関係として成立する。もっと詳しく云えば、人間と人間との関係は、生産を通じて自然に関係するその人間相互の関係であり、人間は労働力そのもの、自然力そのものの面で相互に関係しあう。人間と人間との関係は人間の自然の面の相互の関係である。

（未完）

註

引用文献の略符号は次の用法にしたがった。

- P. K. — K. Marx. Zur Kritik der politischen Ökonomie. Dietz.
K. — K. Marx. Das Kapital. Dietz.
H. — Marx, Engels. Die heilige Familie und andere philosophische Frühschriften. Dietz.
K. L. — Marx, Engels. Kleine ökonomische Schriften. Dietz.
N. — F. Engels. Dialektik der Natur. Dietz.
P. H. — G. W. F. Hegel. Phänomenologie des Geistes. Felix Meiner. 1952.
R. — G. W. F. Hegel. Grundlinien der Philosophie des Rechts. Felix Meiner. 1955.

小論を書くにあたって、高木勘弼氏の次の論文から多くの示唆をうけたことを附記します。

『自然認識と社会認識の問題』